元気を炊き出し

在京東松島会 杉良太郎さん

避難者にモンゴル料理を振る舞う関係者＝東松島市矢本東小

被災者に手作りカレーを振る舞う杉さん＝石巻市大須小

〝国際協調〟で故郷の復興を支援―。東松島出身者で組織する在京東松島会（桜井政文会長）は、中国籍の在日モンゴル人で組織するモンゴル民族文化基金（ガンドシ理事長、本部・東京）の協力で3月31日、避難所となっている東松島市矢本東小で被災者にモンゴル料理を振る舞った。

桜井会長と、ガンドシ理事長が懇意にしていたことから、今回の炊き出しが実現。桜井会長や、同基金役員ら一行13人は3月30日夜に2台の車に分乗して都内を出発。31日朝に被災地入りした関係者は疲れも見せず、てきぱきと調理に当たった。

羊の肉をたっぷりと使ったモンゴル料理の「肉入り野菜スープ」と「肉汁のおかゆ」の2品を用意。矢本東小には30日現在で約300人が避難しており、関係者は羊肉の香りが漂う熱々の汁を被災者に提供した。

震災直後から両親と妹の4人で避難している矢本東小2年下村光樹君(8)は「避難所ではおにぎりを食べているが、おなかがすく時もある。モンゴル料理は肉がおいしく、体も温まった」と笑顔で話した。

同基金役員たちは炊き出しとともに、子どもたちにモンゴルの童話の絵本や、バレーボールの球もプレゼント。馬頭琴の演奏もあった。桜井会長は「モンゴルの人たちの協力に感謝したい。さらに絆を強め、故郷の再興を支援したい」と強調する。

同基金は、日本の支援を受けて留学生のバックアップなどの活動に取り組む。ガンドシ理事長は「日本は第二の古里。縁のある東松島をこれからも勇気づけていきたい」と一日も早い復興を願った。

この日は、同会と同基金が都内で行った被災地支援の募金活動で寄せられた18万8356円を東松島市に贈った。

◇

東日本大震災の被災地を支援しようと、俳優の杉良太郎さん(66)、演歌歌手の伍代夏子さん(49)夫妻が、1日から3日間の日程で石巻市の避難所を訪れ、炊き出しを行い、自慢のカレーライスを振る舞った。

約530人が避難している同市雄勝町大須の大須小では2日の昼食を用意した。デビュー前にカレー店で住み込みで働いた経験を持つ杉さんが、肉がたっぷり入り、ニンニクを効かせたカレーを調理。伍代さんは豚汁を鍋からよそい、被災者一人一人に手渡した。

杉さんらは、スタッフ約25人とキャンピングカーなどで石巻市入り。同市雄勝町の旧水浜保育所や同市流留の万石浦中などを回った。衣類や暖房器具、ガソリンなど大量の救援物資もトラックで運び込み、各避難所などに提供した。

杉さんの息子で俳優の山田純大さん(38)も同行。杉さんは「津波の力のすごさを感じた。つらいけれどしばらくは泣いて、休んだら歩き出さなければならない。精神的にまいらないよう心のケアも必要だ」と話した。

カレーライスを味わった同市雄勝町大須の主婦阿部すみ子さん(51)は「本格的なカレーは久しぶりでおいしかった。杉さんは男らしかった」と感激していた。